

目は口ほどに物を言う

「目は口ほどに物を言う」という言葉を知っているか。

相手に伝えたいこと、表現したい自分の思い・考えを音声として物理的に空気の振動に変えるのは、発声器官と呼ばれる人体の構造である。肺から送り出された呼気を声帯で振動させて音に変え、口腔や鼻腔で共鳴させて言語音を発生させ、その空気の振動を口や鼻から人体の外部へ発散させる。

一方、目はそのような空気の振動は生みださない。なのになぜ「目は口ほどに物を言う」と言われるのだろうか。コミュニケーションの手段は、本来なら言語の記号そのものだけではなく、その声の声色・高さ・大きさ、眉・目・鼻・口・頬の動きなど顔の表情すべて、全身の態度など総合的なものであるはずだ。例えば、同じことを言っても、相手の目を見て真剣に伝える場合と相手に背を向けて投げやりに伝える場合では、相手に伝わる意味は全く違ったものになるということは、理解できるだろう。SNS上で誤解が生じるのは、字面だけでコミュニケーションしようとして、意図が十分伝わらないことがあるからだ。

今コロナ禍にあり、すべての人がマスクを着用している。目から下の表情はマスクで覆われ、読むことは不可能だ。我々は言語という空気の振動を鼓膜で受け取り、脳で分析し、相手の目と眉を見てその表情を想像し、その真意を探る。本来なら、顔の表情すべてが相手の意図の糸口になるはずだが、今は目と眉だけで伝わる相手の表情を瞬時に読み取るにより、言語と併せて意図的・非意図的に言語外に込められた相手の言葉の真意を必死になって読み取らなければならない。

犬や猫の目をじっくりと見たことがあるか。人間との違いは、いわゆる白目が見えにくく、表に見えるのは黒目がほとんどであることだ。また、目は、肉食動物は顔の前面に、草食動物は顔の側面にあることが多い。シマウマなどの草食動物は野生環境のもとでは、いつ肉食動物に襲われるかわからず、常に360度の視野を持って警戒している。一方肉食動物は、獲物を目で確認し、狙いを定めたら一気に獲物めがけて追いかける。そのスタイルの違いが目の位置の違いに表れている。黒目ばかりしか見えない目は、相手に視線を悟られないためにそのように進化した。白目の中に黒目があると視線が特定され、隙が生じる。野生環境では、その隙を狙われてしまうからだ。動物の絵を描くときに、白目のある目を動物に入れると一気に人間っぽくなる。試してみたら面白い。

一方人間は、視線も一つの表情になる。例えば、気分が落ち込んでいるときは自然と視線が下を向いてしまう。遠くを見ているようなときは心ここにあらずで、その視線を頼りにどのような声をかけたらいいか考えることが、円滑なコミュニケーションにつながる。怒りの際は眉が吊り上がって目が三角になり、笑顔では眉も目じりも下がり、ほほえましい時には目を細め、驚いた時には目を丸くし、悲しい時には涙が出る。それが「目は口ほどに物を言う」ということなのだ。「苦笑い」とは、苦々しく思いながら目は笑っていないけれど、口元だけわざと仕方なく笑顔をつくる表情だ。目には素が出る。

そんな中、私の目を見て挨拶ができるようになった人が格段に増えた。感覚的には、約8割の人が目を見て挨拶してくれる。また、約2割の人が目元の笑顔で挨拶ができている。私も笑顔で挨拶することを心掛けています。一方いつも笑顔で挨拶してくれる人が目を伏せて通っていくと心配になる。

「挨拶日本一の高校を目指して」は、学校のための目標ではない。皆さん一人ひとりが社会へ出ていくまでに身につけておきたい自信と誇りを獲得する手段の一つなのだと理解して、一人ひとりが実践してくれればうれしい。

We keep on challenging. 挨拶日本一の高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩